

日本文学会の思い出

——日本文学会五〇周年に寄せて——

伴 利 昭

私が日本文学会の会員となったのは昭和五十一年（一九七六）四月のことであったから三〇年近く以前のことになる。今振り返れば、時代の隔たりと当時の状況の反映とかがないまぜに思い出となつてよみがえってくる。パソコン等情報機器など一切ない頃であつたから、思えば何もかも手作りだつたような気がする。昭和四〇年代は大学紛争の時代で、東大安田講堂の全共闘派学生による封鎖と機動隊導入事件を頂点として、全国あちこちの大学から騒動が報じられたが、やがて少しずつ下火となつていった。しかし、五〇年代初めの頃はまだその余韻を少し引きずつていて、全共闘の思考をよしとする学生とこれに対抗する自治会系の学生とが議論を闘わせる折々があつた。既製の権威を打破して新しきを生むと称して授業粉碎を掲げる動きもまだ盛んだつた。これに対抗して自主ゼミを立ち上げて学生の自主的研究を目指すという空気も一方で強く出てきた。ただ、問題は、専門的智識も未熟で学問のレベルも低い者同士の自主的活動は有意義な点多々あつたが、参加学生の中に飽き足らぬ思いと不満足感を持つ者が多かつ

たところにある。こんな隙間を埋めるのに日本文学会の各研究部会が果たした力は大きかつたと思う。各部会が教員も院生も上級生もOBも参加するという構成上の特性は今後とも教学上の大きな力となり続けることだろうが、大学紛争時期に果たしてきた意味合いは特別のものであつた。少しおおげさかも知れぬが、今となつては歴史的意味合いとして思い起こすことである。

具体的な活動の中で、印象に残っているのは、参考文献や論文のデータを部員が手分けして雑誌や各大学の研究紀要を集めてまわり、その結果を謄写版でガリ版印刷して、互いの利用に供していたことだ。この頃の日本文学共同研究室は、今はない広小路学舎の清心館二階にあつた。日本文学会会員が常に詰めていて、ここで蠟原紙を鉄筆でガリガリとヤスリ上で刻字していたものだ。この原紙をセットしたものを用紙の上に当て、その上から油性インクをつけたローラーを押し付けるように転がせて刷ると一枚の印刷が出来上がるという原始的な印刷道具である。なかなか力もいる。共研ではいづれだれかがガリ版印刷をしていた。冷房設備

などのない頃だから夏には窓を開け放つての作業となる。その窓のすぐ下は廬山寺の平安朝風と称する庭である。その庭を観光客が縁側に座して眺めているところを二階から顔を出して見下ろすという形になるので、寺から度々苦情が寄せられたこともなつかしく思い出す。

京都に立地する学校の利点を生かそうと文学の故地をあちこちに尋ねたのは楽しい思い出。宮内庁京都事務所にも数人ずつに分かれて御所見学の申請をして、清凉殿・紫宸殿に上げてもらって見学したのは忘れられないことだ。御修法を東寺で、法華八講の問答と行道とを目吉大社で見せていただいたのにも感激した。

京の山々にもよく登った。比叡山には「きらら坂」からも上がったこともある。今の比叡山ホテルの辺りから無動寺へ上がり、ここから大津へ少し下って、紀貫之のお墓も尋ねた。惟喬親王が都を眺めやったという伝説のある棧敷岳にも登ったが、これはきつかった。愛宕山では、山上に登った後、文徳天皇田邑陵へと下り、保津峡駅まで歩いて戻ったが、このときはクタクタ。

古代文化と文学の故郷、吉野へは恒例のようにして毎年出掛けた。吉野の立派な旅館「辰巳屋」さんの若主人が故・国崎望久太郎先生が教えられたという縁で安く泊めていただいた。翌朝早く宿発ちして、水分神社から金峯神社へ。ここから谷を下って西行庵へ。芭蕉のいう「とくとくの清水」から山上が岳への道をたどり、女人結界石まで上った後、次には象谷（きんたに）を下って宮滝まで出た。

山部赤人や天武帝離宮跡をしのぶゆとりもないほどに皆疲れてしまったが、よく歩いたことだ。これらの道は、この度「祈りの道」として世界文化遺産に登録された道のうちだが、この登録のニュースは、日本文学会での探訪とも重なり合って我がことのようにうれしくもあり、誇らしいことだった。

昭和五〇年代頃の日本文学会のこと——手作りの研究活動・足を棒にしながらの文学遺跡探訪など——改めて今、新鮮な感動としてよみがえってくる。
（ばん・としあき 本会名誉会員）